

地域木材研究会

地域木材研究会では20年度に以下の2つの活動をしました。

1. 「木の文化と環境フォーラム」への参加
2. 長野県産材の活用の促進

1. 「木の文化と環境フォーラム」への参加

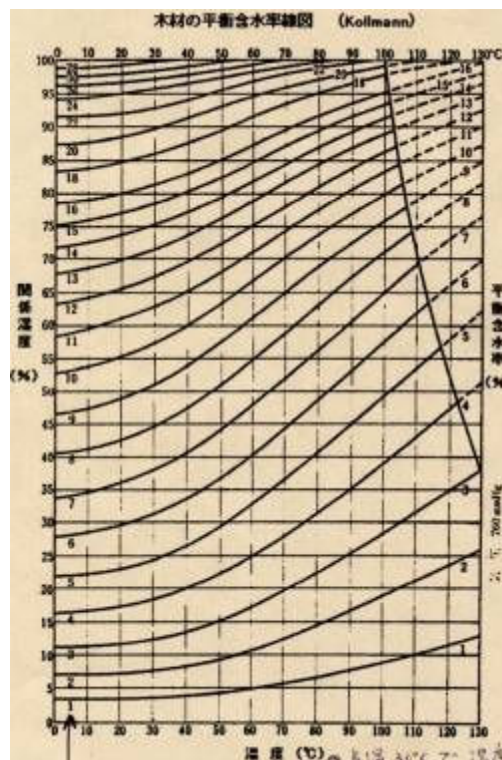
20年度の「木の文化と環境フォーラム」は数回が開かれましたが、そのうち以下の4回に出席しましたのでご報告いたします。

① 「研究発表会」 2月3日

以下の3種類の研究発表がありました。

- a 「針葉樹家具の可能性と課題」 工業技術総合センター 上田友彦氏  
針葉樹が実際に家具に使われている実状の説明があった。木目が強い・節が多いなどの問題は、塗装や意匠的に使うことでカバーする。また柄が効きにくいので工夫が必要である。
- b 「木材のトレーサビリティシステムを考える」 (有) 住まい考房 清水宏氏  
トレーサビリティとは「製品の流通経路を生産段階から最終消費段階あるいは廃棄段階まで追跡が可能な状態」である。シックハウス問題などから消費者の製品の安全性に対する関心が高まり、木材に関してもこの「追跡可能性」が求められてきている。文字・バーコード・電子タグなどの方法が考えられ、コンピューターで管理する。また、トレーサビリティがあることが付加価値になる。
- c 「木材を上手に使うための乾燥について」 林業総合センター 吉田孝久氏  
木材はそれぞれ含水率が異なり、本当は樹種ごとに異なった人工乾燥スケジュールがある(下・右の写真)。

樹種	含水率15%まで (15%以下)			含水率1%当り (1%以下)			全乾 密度	
	幅目	径目	長さ	幅目	径目	長さ		
針葉樹	スギ	3.5	1.1	0.03	0.25	0.09	0.011	0.33
	ヒノキ	3.5	1.5	0.05	0.21	0.11	0.013	0.41
	アカマツ	4.4	1.9	0.03	0.31	0.15	0.013	0.55
	カラマツ	4.1	1.7	0.01	0.31	0.14	0.011	0.49
広葉樹	ヤリ	2.2	0.5	0.02	0.20	0.06	0.011	0.29
	ブナ	6.9	2.4	0.11	0.33	0.18	0.017	0.68
	ミズナラ	5.9	2.0	0.24	0.30	0.16	0.016	0.70
	アカガシ	6.8	2.6	0.09	0.38	0.20	0.013	0.92
	イスノキ	6.9	3.9	0.11	0.39	0.21	0.012	0.92



② 「総会」 7月5日

総会では19年度の事業報告・決算報告がされ、承認されました。

また、20年度の事業計画・収支予算が承認されました。

以下の2つの講演がありました。

1つ目は上松技術専門校校長の三宅芳美氏が「木工分野での採用する側と採用される側」という題で講演され、採用・就職の実態のご報告と、企業が求める人材に専門校も答えていかなければならない旨のお話をされました。

2つ目は埼玉大学教授の内田青蔵氏が「わが国近代住居の展開に見られる和洋折衷の方法」という題で講演され、「和館」が「和洋館並列」になり、その後洋館が和館に取り込まれ「和室・洋室」になる様をお話しになりました。



③ 「林業地を歩く」 8月2日

大町の「荒山林業」の山を1日かけて見て歩きました。その中で、家具な

どを作る事業者が、どのような材を要望しているのかなどを話し合いました。

荒山さんの所有林は総面積が245ヘクタールで、その内人工林が68ヘクタールです。スギ・ヒノキ・アカマツ・カラマツなどの針葉樹も多いですが、その中にナラ・コナラ・クリ・サクラ・カエデ・ホオ・ブナなどの広葉樹も多数見られました。針葉樹の単層林もありますが、針広混交林も多く、その中では有用広葉樹の幼樹も下刈りすることなく残しているので、将来に渡っての供給が期待されます。

針葉樹は大径木も多く、カラマツをテーブルにしたものなども実際に見ましたが、天然のカラマツに近いようなつんだ木目で、2枚接ぎの立派なものでした。

広葉樹は30～40センチぐらいのナラ・クリ・サクラなどがあり、小物・箱物や脚材に利用できる可能性がありました（以下の4枚の写真）。





④ 「日本木材学会松本大会」 3月16日

松本市の「まつもと市民芸術館」において、「木の文化と環境フォーラム」が協賛する日本木材学会大会が開かれました。会場では、学会の研究発表や公開シンポジウムがあり、その中には木材のトレイサビリティやウッドマイレージの重要性を訴えるものもありました。また、木工会の有志の作品展示も行われました。

研究発表は木材に関する多岐にわたるものです。ほとんどが専門的で木工には直接関係ない発表でしたが、中には曲げ木の条件に関するものや、「あて材」の細胞壁レベルでの解析など、知っておくと仕事上ためになる情報もありました。

公開シンポジウムでは以下の講演がなされました。

a 「森のめぐみに育まれて」 キャスター 草野満代氏

ノルウェーでのオリンピックの時に感じた、お年寄りのペースも受け入れる大らかな現地の社会性は、日本が過去に忘れてきた「森と関わる生活」での「手間と暇」がもたらすものだと思う。日本の余裕のない社会を変えるにはもっと森と関わるべきだ。

b 「長野県の森林の展望」 長野県林務部 佐藤智一氏

長野県は森林面積全国第3位で、全県の78%が森林だ。「森林税」も導入され徐々に人工林の間伐を進め、生産性・木材品質の高いものにしてゆく。しかし、間伐材の80%が捨てられているのが現状だ。これを打開してゆくため、ペレットとして燃料にしてゆく取り組みや、カラマツ材の新しい利用方法の開発を進めてゆく予定だ。

c 「愛知の森林環境税と海上の森での取組」

愛知県は全県の43%が森林であるが、そのほとんどが人工林で、かつ、手入れが進んでいない。今後、「あいち森と緑づくり税」を設け、人工林・里山林・都市部の緑化に使ってゆく。愛知万博でつぶれる予定だった「海上の森」は「あいち海上の森条例」などで保全されることになり、今後、森林・里山の保全、森に関わる人材養成、森の情報発信の地になってゆく予定である。

d 「バイオ燃料…車両への影響と製造技術」 トヨタ自動車(株) 林倫氏

地球環境への配慮から「次世代バイオ燃料」として木材が注目されている。しかし、

材木量の安定的確保や輸送の利便性、燃料によるエンジンの劣化などの技術的克服の問題がある。今後、他国との競争に負けない技術革新と異業種間協力が必要である。

e 「森林資源発の最先端素材で拓くバイオマス時代」 (株)東芝 小西千晶氏

現在は利用されず捨てられている材木から炭素を抽出し、カーボンナノチューブ・ファイバー・コイルを作り、金属・プラスチック・セラミック・セメントなどに混ぜ、新素材を作る研究を進めている。しかし、木材チップを集める方法やコストを下げる技術の開発など一企業ではできない問題もある。ナノカーボンは新たな木材利用方法であり、林業を盛り立てる原動力になるので、各業種の連携が必要だ。

## 2. 長野県産材の活用の促進

### ① ハリエンジュ材の活用

ハリエンジュは明治初期、北米から荒地や法面の緑化などのため移入されたものであり、今ではその繁殖力の強さから川・山の様々な荒地に入り込み自生し、自然の生態系を圧迫して問題になっています。

日本各地でハリエンジュの駆除がされており、長野県でも国土交通省千曲川河川事務所が、河川敷のハリエンジュを市民が伐採し薪などに利用する事業を進めています。民間では松本の会社がフローリング材などを生産しています。しかし、お金(税金)をかけて処分しているものも多く、利用しなければただの「無駄」なのです。

この無駄をなくすためハリエンジュ材を家具などに利用し、それを積極的にアピールすることで、「信州に根づく家具工房」が地元の材を有効に活用している姿勢を、一般の方に示していこうという活動です。まだまだ材の流通の面など問題はありますが、まず始めなければ変化はありません。

メールなどでお知らせの通り、2007年の暮れに地域木材研究会有志で、千曲川河川敷のハリエンジュを伐採しました(下・右の写真)。





これを1年間天然乾燥し、今年の2月に人工乾燥しました(左の写真)。ハリエンジュは天然乾燥の時に虫が入りやすく、また、人工乾燥も含めた中で割れが生じ易いので、あまりいい材料にはなりませんでした。

しかし、会員の中でご希望の方には材をご提供し、お客さんに魅力的な製品開発をして頂くことになりました。それら製品に期待しますので、宜しくお願い致します。

今年は木工会の展示会でこの材を使ったコーナーを作り、捨てられる部分も多い地域材・ハリエンジュ材を活用する姿勢を示してゆきたいと考えています。

## ② その他県産材の活用

荒山林業さんと交流を持ち、20年度には、いろいろな種類の県産材を使ってみました。30周年記念作品展には、県産材で作った製品の展示もしました。

使ってみると、会員の皆さんからは以下のような指摘がありました。

- a. 質が悪い。
- b. 使いたい樹種を必要な量、確保できない。
- c. 製材・乾燥してくれる業者を確保しづらい。

しかし、上記のような問題点を持ちつつも、今年もできるだけ県産材の活用を考えています。その理由は前のページにも書きました通り、木材にもトレーサビリティやウッドマイレージの開示が求められつつある現在、長野県に住んでいて長野県産材を使えばこれらの開示は比較的容易に解決できると思われるからです。そのことによって、木工家も環境への関心がある事をアピールする必要があると思われます。そのために「使いにくい」と考えられている上記の材料も、積極的に活用方法を考える必要があると考えます。

先日も荒山さんを交えて話し合いが持たれ、林業の現場を知って頂くために、木工会会員に実際に山に行って、伐採を試みて頂くイベントを行う計画も議論されました。荒山さんだけでなく他の林業家の方々ともネットワークを作れるように計画を進めていく予定です。

こちらにもいろいろ問題はありますが、まず始めなければ何も変わらないし、林業や製材業も変わっていきません。よって今後、小規模でもいいので、県産材の確保や林業家の方々との交流を進める予定です。

(一部写真撮影：上田友彦氏。 丸山 記)